

6/23沖縄慰霊の日

私たちは、知らないので無く 知らされていないのだ
戦争の悲惨さに目をそらしてはいけない

1945年、太平洋戦争末期4月1日沖縄に米軍が上陸を開始したことにより、沖縄本島が戦場となり日本で唯一地上戦が展開されました。当時日本軍の沖縄守備隊と米軍の戦闘は住民を巻き込み双方で20万を超す犠牲者を出す熾烈なものでした。そのうち12万人が沖縄県人でした。沖縄県民4人に一人が犠牲になったこととなります。

物量で圧倒的有利にたつ米軍は徐々に日本軍を追い詰め、日本軍は南部へ撤退し、6月23日摩文仁現在の糸満市あたりで司令長官が自決し、組織的な戦闘が終わりました。その過程では、米軍に投降を許さない日本軍は住民に対し自決を強要し戦闘員でも無い住民が多く犠牲になったのです。沖縄県はそういった、悲惨な戦争を風化させないため、6月23日を犠牲者の追悼と戦争をしない決意をし、「慰霊の日」として決めました。

慰霊の日「平和の詩」

毎年、式典で平和の詩が朗読されます。今年は高校生の^{へいあん}平安名秋（17）さんが誌を朗読しました。平安名さんは中学生の時、祖母と摩文仁の平和の礎を訪れた際、沖縄戦で兄を亡くした祖母が涙を流すのを見て衝撃を受け平和を伝える重要性を知ったことを詩に表現しました。「一略一 平和とは何かを 私たちにできることは何かを 私たちは過去から学びそして未来へと語り継いでゆきたいおばあさんの涙を 一略一 」そしてこのようにも言っています「平和は不確定で危うく崩れやすい いつもそばにあるのに いつの間にかきえてゆく」平和の詩より

78年前の出来事を忘れてはいけない

この情報が出る頃は、沖縄は梅雨明けでしょう。まぶしい太陽の光が降りそそぎ、青い海白い砂浜南のリゾートにはいつもの沖縄の日常がきます。しかし78年前を知るおじい、おばあは悲惨な光景を忘れることはありません。そんな思いを踏みにじるように日本政府は、辺野古に海兵隊の新基地、離島のミサイル配備など軍拡競争に奔走し住民が望む「基地の無い平和の島」とは真逆の道を進んでいます。またそろ標的になるのではと住民の不安は増しています。

平安名さんの平和の詩から

「先人たちが紡いできた平和を私たちが紡いでいこう

平和を創り 守ってゆく この沖縄の「チムグクル（こころ）」平和の詩より